

スポーツ史学会第40回記念大会シンポジウムおよび事前抄読会のご案内

スポーツ史学会第40回記念大会では、「歴史学と社会学の対話——1964年東京オリンピックをめぐって——」をテーマとするシンポジウムを開催予定です。この討論をより有意義なものとするために、オンライン・ジャーナル・クラブ(抄読会)を開催することになりました。本テーマに関する欧米の研究動向について理解を深めることが目的です。関心がある方は是非ご参加ください。

日程、取り上げる文献、報告者、申し込みフォームは下記のとおりです。

➡ https://sportshistory.sakura.ne.jp/images/40osaka/journal_club_2026_02.pdf

なお、記念シンポ「歴史学と社会学の対話——1964年東京オリンピックをめぐって——」の趣旨および報告者は下記のとおりです。

●日時: 2026年12月6日(日) 14:35～16:00(予定)

●会場: 大阪体育大学

●シンポジスト: 市橋 秀夫(埼玉大学)

石坂 友司(奈良女子大学)

アンドレアス・ニーハウス(ゲント大学)

モデレーター: 坂上 康博(一橋大学名誉教授)

●テーマ設定趣旨(大会組織委員会)

歴史家と社会学者は知的な隣人である。とはいえ必ずしも良好な隣人ではない。歴史家と社会学者の会話は、ときに「耳の悪い人同士の会話」(フェルナン・ブローデル)といわれる。互いに相手の話に耳を傾けようとしないからだ。本シンポジウムはまずその陥穽から逃れることを目指す。そして、互いに他領域の研究手法や研究視角などとすり合わせながら、自らの拠り所となる研究の構えや、方法論的な足場などについて深く内省する機会とし、フロアの会員諸氏と共に、今後の学術の発展に資する新たな知見やアイデアを探りたい。

その際、議論の無方向な拡散を抑制するため、1964年東京オリンピックを素材とする。スポーツ史とスポーツ社会学の双方で、既に一定の研究蓄積があるからだ。といっても、議論の中心は、1964年東京オリンピックそのものではない。方法論や分析視点、解釈フレームといった、どちらかといえば理論的な議論に重心を置きたい。そこには、史料実証主義に流れて自足しがちな近年のスポーツ史学界の閉塞感を打ち破りたいという野心もある。

詳細は学会ホームページ <https://sportshistory.sakura.ne.jp/taikai/next.html> でご確認ください。